

日本語教育海外実習の意義と課題：甲南大学の台湾実習

著者	中島 孝幸
雑誌名	甲南大學紀要. 文学編
号	167
ページ	15-22
発行年	2017-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00002346

日本語教育海外実習の意義と課題

——甲南大学の台湾実習——

中 畠 孝 幸

1. はじめに

日本語教員養成において仕上げの段階で行われるのが日本語教育実習である。その方式は、国内実習、海外実習のどちらを取るかでまず二分され、さらに細かくみると、教育機関によってさまざまな理念のもとでそれぞれの方法が採用されている。いずれにしても日本語教育実習が日本語教員養成課程において重要な位置を占めることは間違いない。本稿では、甲南大学で行われている海外実習を一例として紹介しながら、良質な日本語教員を養成するために、どのような理念をもってどのような配慮のもとにどのような方法を用いて日本語教育実習を行うのがよいのか、という問題を考えてみたい。

2. 甲南大学の台湾実習のあゆみ

甲南大学で海外実習が開始されたのは2002年である。日本語教員養成課程はすでに1990年度から設置されていて実習科目は存在したが、海外実習は行われていなかった。海外実習を行うに際しては、既に海外での実習を行っていた他大学2校を訪問して聞き取り調査を行い、実習の意義や実施するうえでの留意点を洗い出す作業から始めた。その結果、海外実習を行うことに決まり、実習校として台湾の台中にあり筆者の知人が教員として勤務する東海大学に依頼することになった。2001年に現地を訪問して先方の学科の先生方に了解を得た。台湾は距離が近く費用が少なく済む、日本に対し友好的であるといった点から、実習に行く学生たちに初めての海外体験者も少なくない中では、実習地としては最適と考えた。

2002年9月に第1回の台湾実習が実現し、2003年にSARS（重症急性呼吸器症候群）発生のため中止にして国内実習に切り替えたほかは毎年実施し、2016年8月に14回目の実習を終えた。14回の実習に参加した学生の実人数は112名で、複数回参加した学生がいるた

め、延べ人数は123名にのぼる。

これまで実施した14回の実習すべてを筆者が引率し、現地の教員との協力のもとに指導を行った。開始当初から基本的な実施態勢、実施方法は一貫してほぼ変更がない。

3. 履修方法

台湾実習の科目名は「日本語教授法実習Ⅰ」「日本語教授法実習Ⅱ」である。もともとは4年次配当の1科目しかなかったが、2004年度よりⅠとⅡの2科目を設定してⅠは3年次配当、Ⅱは4年次配当として同時開講し、希望すれば繰り返し履修できるようにしたものである。繰り返しリピーターとして参加すると、前年の経験から現地の状況や学習者の特性を理解したうえで活動ができるため、引率者としてはそれを奨励したいと考えているが、実際にリピーターとして2度参加した学生はこれまで112名のうち11名に過ぎない。繰り返し参加する学生が少ない理由としては、実習の大変さ、費用がかかること、就職活動があるため、といった要因が考えられる。

科目は通年2単位で、前期に通常時間帯に15回の授業があり、そこで実習のための準備を行う。後期分として集中的に行うのが台湾実習である。台湾での滞在日数は2016年度の場合、移動日、実習前の準備期間、実習後の自由見学を含めて12日間であるが、実際に教壇実習を行うのはそのうち月～金の5日間である。

前期の授業においては、後期の台湾実習に備えて、授業計画を立て模擬授業を行う。前期期間中に台湾において並行して学習者募集を行ってもらい、生徒の人数やそのレベルについての連絡を受けて、クラス編成、授業内容を考える。クラス編成が決まったら、クラスごとに東海大の担当者で連絡を取りながら、具体的な活動内容を決めてゆく。前期の授業においては「台湾事情」も扱う。それについては次節で述べる。前期の授業は筆者が担当し、後期分の台湾での実習は筆者と現地の教員が共同で担当する。

4. 台湾事情

本実習では、前期15回の通常授業において台湾実習の準備を行っているが、その中に必ず取り入れているのが「台湾事情」を学ぶ時間（各回15分程度）である。これは、台湾の歴史・文化・地理等に関して設定した課題について担当学生が調べてきて発表し、全員が台湾に対して一定の認識をもつためのものである。台湾は1895年から1945年の50年間日本の植民地支配を受けていた。町の中には日本時代の建物が残されていて、幼少期に国語教育として日本語の教育を受けたお年寄りが日本語で話しかけてくることもある。もし歴史を知らないと「あのおじいさん、どうしてあんなに日本語が上手なの？」といった無邪気な質問をしかねない。台湾の学生と共同作業をしていて、台湾のことを日本人学生は何も知らないと思われるのは好ましくない。「台湾事情」を学ぶことを当初から重視して準備に取り入れているのは、そういったことを考慮したうえのことである。

台湾の歴史・文化・地理等といっても、実習期間中台湾に滞在していて日本人学生が疑問を感じるような身近なことがらを中心としている。2016年度前期14回扱った「台湾事情」で設定したテーマ、調べる課題は以下の通りである。(1)日本の旗は「日の丸」だが、台湾の旗は何か。その旗の由来や、その旗がどのような場で用いられているか調べよ。(2)台湾の100元札に印刷されている人物は誰で、何をした人か。また、「民国〇〇年」という年号について説明しなさい。(3)台湾の現在の総統は誰でどういう人か調べなさい。また、歴代の総統にはどのような人がいたろうか。(4)「本省人」とか「外省人」というのは、どういう意味か。



台湾総統府

「二二八事件」について調べ、その事件が起きた要因を関連させて考えなさい。(5)台湾と中国との関係はど

のようになっているのか。中国は台湾をどのように認識しているか、また、台湾側はどう考えているのだろうか。(6)台湾総統府の建物は、むかし台湾総督府といった。その建物とそれに関わる歴史について調べる。(7)台湾で使われている言語について調べてみよう。台湾語と中国語は同じものだろうか。また、「注音符号」とは何か。(8)日本とつながりの深い台湾出身の有名人（スポーツ選手・歌手・俳優等）には誰がいるだろう。それらの人々は日本や台湾でどのような評価を受けているか。(9)台湾の料理やくだものおすすめものを紹介しよう。(10)台湾が日本の植民地になっていたのはいつからいつまでで、その当時、日本語はどのように教えられていたのだろうか。(11)台湾で地下鉄のある都市はどこか。また、台湾の新幹線について知りたい。台湾の主要な都市を地図で示しなさい。(12)高砂族というのは何か。台湾の少数民族について調べてみよう。(13)台湾の主要な産業について調べなさい。(14)台湾の国際的な地位について調べなさい。公式の場（政治やスポーツ）で台湾として登場するか、また、台湾と国交を結んでいる国がどのぐらいあるか調べなさい。

以上、挙げた項目の中には、これだけは知っておいてほしいというものから、知っておくと台湾の理解がより深まるというものまで含まれるが、実習との直接的な関連から言えば、一見あまり重要でないようなことがらの中にも、知っていないと困ることがらがある。例えば、自己紹介で学習者が「私は高雄出身です」と言ったときに「高雄」がどこにあるか知らなければ、話が途切れてしまうであろう。また、クラスで、甲南大生が日本紹介をしたあとに台湾の学生にも同様に台湾の料理や果物、名所等について宿題として調べてきて発表をしてもらうといった活動をするところがあるが、そのとき教授者がそのものや場所を全く知らないと会話に広がり生まれまいであろう（できれば台湾に渡ってからクラス活動の前に料理や果物なら実際に食べておいて、それに対する自分の好みを伝えられた方がよい）。台湾の地理や台湾の食べ物について知っておくのは、クラス活動を進めるうえで必要なことなのである。

本実習においては、後述するように、台湾の東海大学の日本語学科学生との共同作業を行う。授業準備からクラス活動、反省会にわたり、また実習に関わらない食事時間や空き時間においても、一週間の間、一つの目標に向かって朝から夜遅くまで一緒に過ごすことが多い。台湾の学生は日本語学科に所属するため、日本の事情にかなり詳しく、日本に何度も行ったことが

ある学生も珍しくない。台湾の学生が日本を知っている程度に日本の学生が台湾について知ることは短期間では難しいかもしれないが、その溝を少しでも埋めておくことは、お互いにコミュニケーションを図り、良好な関係を築くために重要であると考えられる。また、毎日の活動の時間は、台湾の学生たちの考え方や置かれた立場を知る絶好の機会である。その機会を無駄にしないためにも、台湾の歴史や政治や文化について基本的な知識を得ておくことは不可欠であろう。

5. 実習の特徴

5.1 実習専用のクラスをゼロから作る

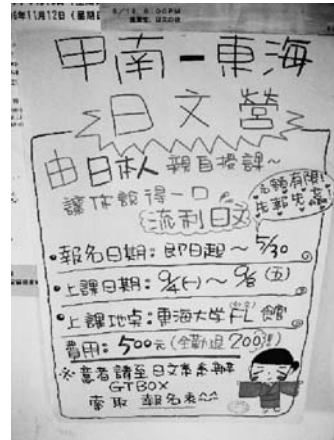
一般に海外実習の方法として多く取られているのは、海外における教育機関のクラスに学生が入り、まずそこで行われている授業を見学してから、在籍する学習者を対象に担当教員の指導を受けながら教えるというやり方であろう。そのやり方を「クラス入り込み方式」と呼ぶとすれば、本実習はその方法を取らず、実習専用のクラスをゼロから作ることから、「クラス作り出し方式」と呼ぶことができよう。

「クラス作り出し方式」の利点としては、既存のクラスではなく新しく作るクラスで行うため、学生自らが学習者のニーズ、レディネスを分析し、それに合った教授内容、教授方法を選び出して自分たちなりの教授活動を行うことができる点が挙げられる。夏休みの時期に日本語を学ぶために集まってくる台湾の学習者が何を求めているか、そのレベルはどのくらいか、どうすれば短い学習期間で満足感をもってもらえるか、といったさまざまな点を考慮しながら5日間の計画を立てる。そのゼロからプログラムを構成する過程自体が実習として非常に大きな意味をもつ。

一般的に「クラス入り込み方式」が、少人数で海外の教育機関に出かけて一定期間現地教員の指導を受けるのに対し、本実習が取る「クラス作り出し方式」では、グループでまとまって出かけ、引率教員とともに短い期間に一気に成果を上げようとする、護送船団方式とも言えるものである。護送船団方式では、うまくいったときには成果が手に取るようにわかるが、うまくいかなかったときには直に伝わってくる学習者の評価を正面から受け止めなければならない。クラスを開設する主体となって全ての責任を負うというのが「クラス作り出し方式」の宿命である。

新しくクラスを作るためには当然現地の教員、学生の協力が不可欠である。生徒募集を行ってクラスを作

る段階は、本実習においては、すべてパートナーの東海大学に任せていると言ってよい。東海大生がポスター



生徒募集のポスター（2006）

を作製して生徒募集活動を行い、甲南大生が台湾に出かけるときには、すでにレベル別のクラスが出来上がっている。そして、東海大生の手配によって第一日目の決まった時間には生徒たちが各クラスに集まった状態になっている。それは非常に恵まれた状況であり、パートナーとしての東海大の教員、学生に感謝しなければならない。

このプログラムは毎年繰り返し実施するうちに東海大学では夏休みの恒例イベントとして認知され、近年では参加希望の学習者総数が100名を超えることも多い。クラスは5クラス設定するので、各クラス平均すると学習者数は20名程度となる。

5.2 現地の教員と協力する

海外実習においては、引率教員の指導だけではうまくいかない。現地の教員の協力が不可欠である。それは、現地の学習者の特性を知っているのは現地教員であるし、実習を行う教室の管理から事務職員との折衝といったことまで、現地教員の助けなしでは成り立たないからである。本実習では、第一回から現地教員と引率教員が協力して指導に当たる体制をとっている。現地教員は、生徒募集時から実習時まで、クラスを成立させるためのあらゆることに気を配り、現地学生に指示を出し、事務職員と交渉を行って円滑な実習の進捗をめざす。それは教室の鍵の管理から、停電時の教室変更までに及ぶ。クラスの指導においては、二名の教員が学生から提出された教案を各クラスに持参し、実際の活動と照らし合わせながら参観する。参観時のメモをもとに午後の全体会（反省会）でコメントを行

い、次の日の活動をよりよいものにする。

5.3 台湾の学生とチームを組んで教える

本実習においては、甲南大の学生が教える側、東海大の学生が学ぶ側という区分をしていない。東海大の学生にも教える側に入ってもらい、共同で教える体制をとっている。すなわち、学習者として集まるのは比較的学習歴の短い学生で、最もレベルの高いクラスでも日本語学科で1年間日本語を専門に学んだ学生たちである。クラスはレベル別に5クラス設定する。学ぶ



クラス担当者の準備風景（2007）

側だけでなく、東海大日本語学科の2～3年次の学生には、教える側に入ってもらい、甲南大の学生と共同してクラス活動をリードする。つまり1クラスを担当するのは、甲南大と東海大の両大学の混成チームということになる。人数は、東海大からは例年1クラスに4名程度、甲南大からは、その年の参加者が10名いれば2名ずつ割り振れるが、10名に満たない場合は、教授者が甲南大1名、東海大数名というクラスもできることになる。

甲南大と東海大の混成チームにするという点は、開始当初からこの実習の特色と考えているところであり、台湾の学生を単に実験台として教えるのは避けて、双方にとってプラスになるやり方をしよう、という基本的考えに則ったものである。混成チームで教えることにより、甲南大の学生にとっては、台湾の学習者とコミュニケーションをとるのはもちろんであるが、同時に、チームを組んで教える台湾の学生とのコミュニケーションもとらなければならない。その両方が成り立って初めてクラス活動が成功したと言え、そこがこの実習で一番難しい点であり、最終的な到達目標でもある。甲南大と東海大の初対面の学生同士が意思の疎通を図りながら、初対面の学習者と向き合って目標を達成する。相手を理解し自分を理解させるコミュニケーション力が鍛えられ養われる。それは、単なる教える技術

の習得よりも大事なことではなかろうか。

共同作業は、実習期間より前から始まる。6月に学習者募集が終了し、クラス分けが終わり、担当者が決まると、インターネットを通じてクラスごとの打合せが始まる。東海大側からは学生の人数、レベル等の情報がもたらされ、甲南大側からはクラスの内容についての計画を提案し、学習者のニーズ、レディネスを考慮に入れながら、やりとりを通してコースデザインをしてゆく。十数年前の実習開始当初はインターネットの利用といっても掲示板やE-mailが主であったが、現在はLINEやFacebook等、SNSの発達により連絡手段も多様化している。インターネットの進展拡大は、教授方法にも大きな影響を与え、前の日にネットから取った画像を次の日に教材として用いたり、LINEの画面をプロジェクターで大きく映しながら会話のやりとりの練習をするといったことが近年は苦も無く行われるようになった。

ただ、ネット上で連絡をするといっても、やはりそれには限界がある。本実習では、甲南大生が台湾に着いてから、最低二日間は東海大生と直接の打合せができるよう日程を組んでいる。実習開始前にクラス毎に直接顔を突き合わせてミーティングをし、最終的なクラス内容を決定し、実習開始日の前日に全体ミーティングで確認してから、実習に入ることにしている。

実習が始まると、毎日がその日の振り返りと次の日の準備に忙殺される。いくら準備をしても、実際にクラス活動を行ってみると、レベルが合わなかったり学習者の興味が別のところにあったりすることが生じるものである。日々修正しながら次の日につなげてゆくため、教案は当日の朝に提出するというのを決まりにしている。したがって、前の日には寝る時間も削って教案書きや教材作りをしていることが珍しくない。日本語の面からは、もちろん母語話者である甲南大生



クラス活動風景（2009）

に優位性があるが、この実習では対等の立場で参加するのが原則である。クラスの進行のためにある学生が中心になり、他の学生がそれを補助するということはあっても、甲南大生が教え、東海大生がアシスタントとなるといった役割の固定化はあってはならないと考えている。したがって、クラスの打合せや進行においては、甲南大生は母語話者の利点を生かし、東海大生は自身も日本語学習者であり学習者の心理をよく知っているという長所を生かして、お互いに主体性をもって実習に臨むことを求めている。



みたらし団子作り (2012)

5.4 生徒に合わせて教える内容を考える

クラスは全くの初級から日本語学科での1年既習クラスまで、レベル別に5クラス設定する。クラス活動ができるのは5日間(毎日午前中の3時間)であるので、与えられた15コマをどのように埋めるかを考えてコースデザインを行う。

先に触れたように「クラス入り込み方式」ではなく「クラス作り出し方式」を採用するので、生徒のニーズ、レディネス等を踏まえ、5日間で何をするのがいいか、何をすれば学習者に達成感をもってもらえるかを一から考えることになる。

普段の授業で教わること、例えば「受け身文の作り方」や「敬語の使い方」を抜き出して教えるだけでは意味がない。学習者にとっては、同世代の大学生が日本から台湾に来て目の前にいるわけであるから、日本語を仲立ちとして日本の大学生に触れられること、日本の大学生の気質や考え方が感じられるようなプログラムが組めれば理想的であると思う。どの年度も、各クラスがプログラム全体の目標を設定したうえで、それに向かって15コマの時間をアラカルト式に使う、モジュール型教材を用いた授業を行なっている。

目標設定は、初級クラスであれば「簡単な自己紹介ができるようになる」、一番レベルが高い日本語学科1年終了クラスであれば「日本人に台湾の紹介ができるようになる」といった簡単な文で表せるものである。

中級以上でよく扱われる個々の活動テーマとしては、日本の食べ物や観光地を知る、台湾の食べ物や観光地を紹介する、旅行計画を立てる、日本の学生と台湾の学生の違いを見つける、漫画で方言を理解するといったものがある。年度によっては、商品のコマーシャルを作成して演じる、日本語学科のイメージキャラクターを制作する、といったものもある。初級ではゲームや歌を取り入れた活動が多い。そのほか毎年行われているのは「調理実習」で、お好み焼きやみたらし団子の

作り方を聞き取り、実際に体を動かしながら作って食べる。その過程で交流ができ、日本から持参した材料を使ってその場で作ったものを味わえることから人気が高いようである。

最終日には全員が一会場に集まりクラス毎の成果発表会を行う。ゼロから始めた初級クラスの学習者が、名前や家族のことのほか、自分の好きなものについてまで5日間の活動で言えるようになってきているのを目にするのは嬉しい。

6. 参加学生の感想

毎年、実習終了後に各クラスの活動内容の紹介と反省、各個人の感想をまとめて報告書の発行を行っている。細かな日程と参加費用の内訳もそこに掲載している。これまで実習を14回実施しているので14冊の報告書が印刷されてある。その報告書のタイトルと実施年は以下の通りである。「台中の人たちと」(2002)、「台湾と繋ごう日本語で」(2004)、「台湾での日本語教室」(2005)、「学ぼう伝えよう日本語で in 台湾」(2006)、「伝えたい!!ウチらの日本語」(2007)、「手作り日本語教室」(2008)、「伝えるつなぐ私たちの日本語」(2009)、「日本語でつなぐ思い」(2010)、「日本語で築いた絆」(2011)、「台湾実習10日間の軌跡」(2012)、「日本語でつむぐ夏」(2013)、「台湾実習日本語の夏」(2014)、「日本語で繋ぐ台湾の夏」(2015)、「日本語でつながる。越える。台湾の夏」(2016)。いずれも参加学生が主体的に考えたタイトルであるが、暑い夏休みに日本語を通じて台湾の学生とつながりをもてたことがタイトルによく表れているように思う。

それらの報告書の中から参加学生の感想をいくつか抜き出してみよう(なお、文章中に出てくるGTとはGreat Teacherの略で東海大から教える側として参加

したメンバーたちを指す)。

出発の前日は、夜遅くまで教材の準備をしていた。台湾に着いて、東海大学でGTと会ってからは、ぎゅっと濃縮された時間を過ごすことになった。四六時中行動を共にし、授業について真剣に話し合い、一緒にご飯を食べ、遊びにも行った。GTは日本語が上手で、言葉も道も、台湾のことが何もわからない私を、驚くほど親切に助けてくれた。しかし、自分が担当する授業の前日は、緊張と教案を書くことで頭がいっぱいになり、他のことは何も考えられなくなってしまった。(2006年報告書より)



中庭に出たのクラス活動 (2010)

ここに書かれている内容は、どの年度に参加した学生も同様に感じていることであろう。授業準備に追われること、東海大学の学生(GT)のサポートが力になったことには、多くの学生が報告書の中で言及している。東海大学の学生の支えがなければ台湾での充実した時間が得られなかったという感謝のことばも必ずと言っていいほど見られる。台湾の学生とチームを組んで教えることは、相互交流・相互理解のうえで大きな意味ももっていることが分かる。

また、授業とは離れた台湾での滞在中のことに関しては、次のような感想が見られる。

今回台湾に十日間滞在してみて、改めて外国語の必要性を痛感しました。当然ですが、台湾人とコミュニケーションを言葉でとろうとすると中国語か台湾語が必要で、それらができれば問題ありませんが、残念ながらそうではないので、上手にコミュニケーションがとれませんでした。「砂糖なしで」と伝えられなくて結局砂糖入りのを飲んだり(あれはあれでおいしかったのですが)、お店の人の言っていることが最初理解できなくて、少々怒らせてしまったり(一人だったので、少し

恐かったです)。授業のときも、GTのメンバーに日訳してもらうことがありました。今思うと日本にいながら日本語を教えている時は、外国語の必要性をそれほど重要視していませんでした。もし中国語をいまより話し聞くことができるようになれば、さらに多くのことについて、GT・東海のみなどとコミュニケーションをとることができるようになるはずです。だから次に行くときまでに言葉の面で、今よりも自立できるようになりたい、と強く思いました。(2005年報告書より)

ここで言及されていることから、海外実習の意義を再認識させられる。日本人が海外に出れば外国人となる。外国人になって初めて感じ取れることがらも多いであろう。外国人になってみると、日本語学習者が日本で感じる不安等の心理も理解しやすくなるであろう。先の感想の最後では「次に行くときまでに言葉の面で、今よりも自立できるようになりたい」と外国語学習に対する意欲が表明されている。日本で外国語学習の重要性を教師が精一杯の言葉で説くより、一度海外に出て学生が身を以て必要を感じ取る方が格段に効果があることが分かるのである。

一つ気がかりなのは、実習期間中は、東海大学の学生がずっとつきっきりで世話をしてくれるため、前掲の学生のように一人で行動することが少なく、言葉を通じなくて困るという実は貴重な体験をすることがあまりないことである。安全の面からは一人で出歩くことは奨励されないことかもしれないが、現地の学生に頼らず、小さなことでも独力でできることは自分でやってみるという態度でいけば、海外実習からより多くを得ることができるのではなかろうか。

7. 海外実習の意義

筆者が考える海外実習の意義とは、先に述べたように、学生が海外に出ることにより外国人となり、身を以て異文化接触を体験することである。時には不自由を感じたり嫌な思いをしたりしながら自分に当たる異文化の風を感じ取ることである。それによって日本語学習者が抱えている不安に思いを致すことができる。そのためには何事も人に頼らず自分でやるという姿勢が必要になる。

また、海外で実習することにより、その土地の風土や人々に触れ、それが海外で日本語教師として仕事をしようという意欲につながることもある。この原稿を執筆している時点(2016年12月)で、過去にこの実習

に参加した甲南大の卒業生が3人、台湾で日本語教師の仕事に就いている。一人は台北、一人は台中、もう一人は高雄と、台湾の北から南までに及ぶ。台湾で日本語教師として働く気になったのは、おそらく、この実習での厳しくまた楽しい経験があり、交流した台湾の学生の暖かさ、台湾という土地の魅力に惹かれたからであろう。台湾で働く原点となったのは紛れもなく本実習であると思われる。

それらの卒業生は、実習で先輩が台湾を訪れた際には会いに来てくれたり、差し入れをしてくれたり、実習を見てアドバイスをしてくれたりする。現在台中YMCAに勤めている卒業生の一人は、実習開始前の一日、先輩たちを自分の担当クラスに呼んで授業を見



台中YMCA訪問(2016)

学させ、クラスの生徒たちと交流する機会を作ってくれている。台湾実習という共通の核をもった先輩と先輩がつながりをもてるのは喜ばしいことであり、実習がその場限りのものでなく、新しい種子や果実を生むもととなっていることが実感できる。

さらに、海外実習によって海外の同世代の人々との交流が深まるという点も見逃せない。一週間、一日のほとんどを一緒に過ごし緊密な関係になった者同士は、帰国後卒業後も連絡を取り合って友情を温め合っている。ときには何年後かに結婚式に招待されて日本あるいは台湾を訪れたという話も伝わってくる。この実習開始当初に筆者が考えていた目標の一つは、国際交流と呼ばれる漠然としたものではなく、日本人学生が、「〇〇さんのいる台湾」と、個人の関係でつながる台湾を実感できるようになることであった。子供ができたとき「お母さん(お父さん)には台湾に友だちがいるよ」と言うことができれば、子供にとって台湾がどれだけ身近に感じられることだろう、と空想したものだった。台湾実習を14回続けているうちに、それは単なる空想ではなく少しずつ現実になり始めている。

最後に、海外実習は実習のみに止まらず、実習以外

の大学間の交流を促進するという意味ももつ。2002年に本実習が開始され、2005年3月には甲南大と東海大との間で正式に交流協定が締結され、それ以降は交換留学の形でも両校の学生が行き来するようになった。東海大から甲南大に交換留学でやって来る学生は、この実習に参加して甲南大に来る気になった学生が多い。また逆に甲南大からも、この実習を経験した学生が、その後交換留学生として東海大に赴き、半年から一年滞在した例が複数ある。親しい友人がすでにいる地に留学できるということは、留学の不安の解消に役立つであろう。交換留学以外に「エアスタディーズ」といった他の交流プログラムにおいても、甲南大と東海大との間の緊密な関係が生かされている。

8. ま と め

就職活動の面接では、大学生活で一番印象に残っていることを一つ挙げてください、という質問がよくあ



教会前で全クラス学習者と(2016)

ると聞く。本実習の参加者は、迷いなく台湾実習ですと答えるという。一般企業の面接でこの台湾実習の話題をずいぶん使ったという話を何度も学生から聞いた。そんなとき筆者は、かまわないからどんどん利用するようにと言う。本実習は、たとえ日本語教師以外の職業に就くとしても必ず将来役に立つと自信を持っているからである。外国人と意見調整しながら目標に向かって努力した経験はかけがいのないものであるし、目標を達成したときは大きな自信を獲得したはずである。それはどんな職業においても生かされるものである。

実際の日本語教育現場で仕事をするを前提にすれば、本実習のような恵まれた環境で教えられる機関

はないはずである。つまり、複数のメンバーが助け合いながら共同で教える、学習者がみんな同国人で均一であり困ったときはパートナーに中国語で説明してもらえると、そんな環境が実際の現場であり得ないとすれば、本実習の意義は、ただ教える技術を磨くという点ではなく、もっと別のところに見出さなければならない。何度も触れたように、いろいろ手段を尽くしながらさまざまな方面とコミュニケーションを図るという点が、つまるところ一番大きな意義をもっていると思われるのである。

本稿では甲南大学で行われている台湾実習を例に挙げながら、日本語教育海外実習の意義について考えた。

時代の進展とともに多様化する学習者に対応できる日本語教師の養成のあり方を、さらに課題として考えてゆきたい。

【付記】本稿は、KONAN プレミア・プロジェクト 2nd による KONAN スーパー人材プロジェクト「日本語教員養成ステップアップ」の一環として2016年10月29日（土）に開催したシンポジウム「日本語教員養成の現在と未来」において行った発表「甲南大学の日本語教員養成—台湾での実習を中心に—」の内容に加筆したものである。